

「新超音波医学 第2巻 消化器」

日本超音波医学会 編集

慶應義塾大学医学部教授・外科学

北 島 政 樹

近年、画像診断に関する出版物および論文は実に多く刊行されていることは周知のとおりである。とりわけ超音波に関するものが多く、いわゆる初学者にとってはどれを選択するか迷うところであろう。そのような状況下でこのたび日本超音波医学会が編んだ本書は、種々の選択条件を満たし、その成り立ちからしておおに注目に値する。

まず、「序」の中で松尾裕英前学会理事長が記しておられるように、この企画は学会が主体となって刊行された1966年以来3冊目の成書であることがわかる。学会自体が世に問う形で精力的に編集し刊行を行うことは過去に例をみず、たいへんなエネルギーと協力が必要であったと推察され敬意に値する。加えて新世紀の要請に合わせて内容の大改訂を図り、書名も「超音波医学」から「超音波診断」へ、更に今回「新超音波医学」へと変遷をたどった経緯も興味深

い。その「消化器」の部を読んでみて最も印象的であったのは、その執筆陣の新鮮さと熱意がひしひしと伝わってくることである。一般に学会主導の書物では通例として高名な大家が筆頭著者に並びがちであることは否めない事実である。しかし、本書においては著者はいずれも現在一線の臨床の場で超音波診療に携わり、しかも学識・経験も豊かな医師で占められていることが見てとれ、このことは学会の自信の表れと言っても過言ではない。

いたずらに冗長な説明を避け、要領よく項目別に解説が行われている点は容易に読め、しかもすなりと理解できることは評価に値する。血流情報など必要な箇所にはカラー印刷がなされ、腹部消化器領域におけるこの種の情報がいかに臨床上有用かが示されている点も本書のくふうとうかがえる。必要最小限にとどめた引用文献も特徴の1つである。

全般的な検査の進めかたから始まり、各臓器に対する超音波検査の臨床的意義、局所解剖と正常超音波所見および正常における variant、続いて代表的疾患の超音波所見という構成は読者の気持ちを考えた企画・構成である。更に急性腹症、外傷、術中超音波といった外科的な内容も豊富であり、最新の harmonic imaging など造影超音波検査で締めくくっている点はさすがである。

今回4分冊となった点が、読者にとって便利になったか不便になったかは判断の分かれるところであるが、本書が内科・外科などの専門領域を越えて横断的に消化器診療に携わるすべての医師にとって座右の書となることは確信している。

● B5 頁 320 図 141 写真 429
カラー写真 58 表 41 2000
定価(本体 8,000 円+税) 送料実費